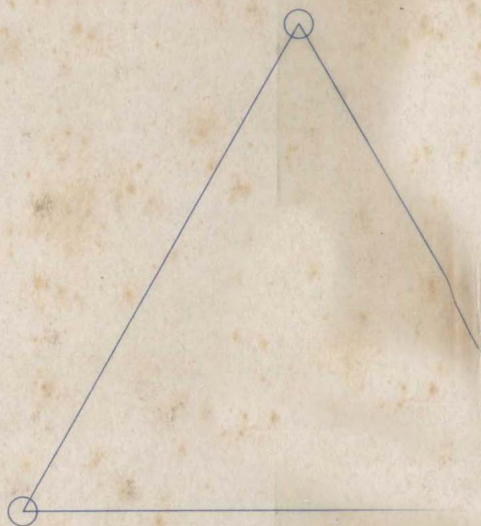






三田誠広
masahiro mita

いちい同盟

一九九〇年一月二十五日 初版印刷
一九九〇年一月三十一日 初版発行

著 者 三田誠広

装 幀 菊地信義

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―一

電話 (〇三) 四〇四―二〇一(営業)

(〇三) 四〇四―八六一(編集)

振替口座(東京) 〇―一〇八〇二

印刷 株式会社享有堂印刷所

製本 小高製本工業株式会社

©1990 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落し本・乱し本はおとりかえいたしません

ISBN4-309-00600-0

いちご同盟



音楽室でラヴェルの『亡き王女のためのパヴァーヌ』を弾いていると、ドアが乱暴に開いて、背の高い男子生徒が入ってきた。

「お前が北沢か」

相手はこちらを見下ろすような姿勢で言った。

ぼくは黙ってうなずいた。

「頼みがある。明日の試合をビデオで撮ってくれないかな」

頼むというより、命令する口調だ。顔は前から知っていた。野球部のエースの羽根木徹也だ。

頬骨の突き出た、大人びた顔立ちをしている。

「音楽室にビデオカメラがあるだろ」

「あるよ」

「宮坂先生みやさかには、許可をもらった。使い方はお前が知ってるということだった。明日は大事な試合なんだ。協力しろよ」

「明日は、用があるんだ」

「どんな用だ」

「聴音のレッスンがある」

「お？」

徹也は口と目の両方を丸くした。表情に一瞬、子供っぽさが宿り、中学生らしい顔つきになった。

「何だ、そのチョーオンとかいうのは」

「音楽のレッスンだよ。毎週土曜日に通っているんだ」

「一回くらい、休めよ」

軽い口調で徹也は言った。細かいことにこだわらない性格のようだ。

「だめだよ」

ぼくがそう言うと、徹也は急に真剣な目つきになって、ぼくを見つめた。

「頼む。ただの試合じゃないんだ。こいつには、人の命がかかっている」

「命？ どういうことだい」

「詳しいことはあとで話す。とにかく、頼むよ」

さらっとした言い方だが、声にも、表情にも、熱意がこもっていた。事情はよくわからないが、「ただの試合じゃない」というのは、本当だという気がした。でも、いったい誰の「命」がかかっているのだろうか。

徹也は小学校の時に、リトルリーグの世界大会に出たらしい。ぼくらの学校では、有名人だった。甲子園に毎年のように出場する私立高校から、スカウトが練習を見にくるという。女生徒にも人気があった。

同級生ではなかったので、徹也のことはよく知らなかった。どうせプライドの高い、いやなやつだろうと思っていた。

でも、真剣な目つきでぼくを見つめながら、「頼むよ」と言った徹也の顔つきは、わるくなかった。

「わかった。聴音は休むよ」

とぼくは答えた。



バッテリーや三脚など、機材の準備をしてから、音楽室を出た。

徹也が口にした「命」という言葉が、胸に残っていた。

校舎の階段を降りる途中で、急に息苦しさを感じた。幼い頃ぼくを悩ませた小児喘息が、ぶりかえしそうな気がした。踊り場の窓を開けて、息をついた。

半月前の日曜日のことを思い起こした。

ピアノのレッスンのあと、家とは反対向きの電車に乗った。郊外の乗換え駅で別の線に乗り換え、さらに駅前からバスに乗った。畑と団地と工場が入り組んだ、なだらかな台地の停留所で降りた。

そこで降りるのは三度目だった。

最初に来た時には、付近の地理がわからなかった。それでも新聞や週刊誌の記事をくりかえし読んでいたから、目指す公団アパートはすぐにわかった。四階建てのアパートの先に、ひととき高い十四階建てのアパートがそびえていた。その十三階の非常階段の手すりに身を寄せて、ぼくは地上を見下ろした。

足がすくんだ。息ができないほどだった。あわてて階段を離れ、エレベーターで下に降りた。

バス停までまっすぐに引き返した。

二度目の時は、少し余裕があった。遺書めいたフェルトペン書きの文字があったという踊り場の壁や、踏み台にした消火器ボックスをじっくりと眺めた。帰りには、少年が通っていた小学校に寄った。通学路や近所のマーケットの店内も歩いてみた。少年が目にしたはずの風景を、少年になったつもりで眺めた。

自殺した少年は、五年生だった。担任の先生に叱られたのが直接の原因らしかったが、その担任の先生が、少年を職員室に呼びつけておきながら、先に帰って知り合いと遊びに出かけていたことが問題になって、新聞にも大きな記事が出た。

週刊誌には、少年の作文と詩が掲載されていた。年齢よりは大人びた、頭のいい少年だった。担任の先生は、子供らしさがないと言って、少年を責めた。努力の尊さを説く先生に対して、少年は、努力なんて虚しい、といった態度を見せたようだ。正義とか理想とかいったものは大人の約束事で、本当は大人たちも、そんなものは信じていない、といった意味のことが、掲載された作文には書いてあった。

記事を読んだ時は、ぼくも、五年生だった。

少年の気持ちだが、半分くらいは、わかる気がした。

二度目に行った時に、アパートの周辺を歩き回ったので、道路のつながりや、街角まがどの風景が記憶に残っていた。バス停に降り立つと、ほろ苦いような、妙な懐かしさに包まれた。まるで、生

まれ故郷に帰ってきたような感じだ。

黄色いセンターラインの入った片側一車線の道路で、左右に店が並んでいた。空き地も多く、商店街というほどではないが、このあたりでは賑やかな場所だ。古びた田舎ふうの雑貨屋があるかと思うと、コンビニエンスストアの真新しい看板がある。落ち着きのない街並みに、ほこりっぽい風が吹き抜けていく。

表通りから一步奥へ入ると、昔の農道をそのまま舗装しただけのような、狭いアスファルト道が曲がりくねって続いていた。そこがバス停から団地に向かう最短距離のようで、けっこう人が歩いている。半ズボンの小学生が少し先にいた。金ボタンの中学生ともすれちがった。

ぼくの中学は公立だが、制服はブレザーだ。都心の中学はブレザーが多い。このあたりは公立も私立も、同じような金ボタンの学生服だ。

団地の建物は、それほど古くはないはずだが、壁は灰色にくすみ、ひび割れを補修したあとも見えた。樋から漏れた水が黒い斑模様を浮き立たせている。

エレベーターで十三階に向かった。外廊下に出ると、地上よりもはるかに強い風が頬を打った。青空が広がっていた。なだらかな丘の向こうに、丹沢の山並みが青く霞んでいる。死んだ少年は、毎日、この山並みを見て暮らしていたのだろう。

等間隔に並んだドアの前を歩いていく。ドアの左右には、風呂場らしい小さな窓と、すりガラスのはまった大きな窓がある。その大きな窓から、ウインド型のクーラーがのぞいているとこ

ろと、そうでないところがあるのが唯一の相違で、あとはどの窓も、同じに見える。

少年が住んでいたのはこの階ではなく、同じ棟の八階なのだが、家族はその後、引っ越したようだ。少年の父親は大卒のサラリーマンで、母親はパートで働いていて、妹が一人いた。どこにでもある家庭だ。

廊下の突き当たりが非常階段だ。風がいちだんと強くなる。

踊り場の壁の前で、ぼくは立ち止まる。

この壁に、フェルトペン書きの文字があった。

むりをして生きていても

どうせみんな

死んでしまうんだ

ばかやろう

灰色の壁をじっと見てみると、フェルトペンの文字が浮かび上がってくるようだ。「ばかやろう」というのは、誰に向かって投げつけられた言葉なのだろう。少年を責めた担任の先生なのか。それとも、世の中全体に対してなのか。

ばかやろう……。

喉の奥で、つぶやいてみる。

ばかやろう、ばかやろう、ばかやろう……。

その日ばくは、風に吹かれながら、長い間、非常階段の上にて、空や、山並みや、時には足もとの地面を眺めていた。喉と胸がひりひりして咳込みそうになるのを、じっとこらえていた。半月前の光景と、目の前の風景とが、重なり合っている。

非常階段の下は、コンクリートで固めたアプローチになっていた。いま実際に見下ろしている中学校の校舎は、軟らかい土を入れた花壇に囲まれている。ここは二階と三階の中間の踊り場だから、落ちたとしても、命に別状はないだろう。それでも、こうして足もとを見下ろしていると、息が苦しく、身のすくむ思いがする。

ばかやろう……。

つぶやいた拍子に、徹也が言った「命」という言葉が、頭のすみに浮かび上がった。

こだわるほどの意味はないのかもしれない。野球に命をかけるとか、一球入魂とか、よくつかわれる言いまわしだ。

でもあいつの目は、真剣そのものだった。何だか、目が光っているようだった……。

校舎の外に出て、正門に向かう。グラウンドの方から、野球部の選手たちの掛け声が聞こえてくる。キーンという打球音が響いている。

ぼくは野球には興味がない。プロ野球の選手の名前も、ほとんど知らない。いままで、野球部

がグラウンドで練習をしていますが、目を向けることはなかった。そのぼくが、いつの間にか、バックスネットの方に向きを変えていた。

女の子たちがネット裏に群がっていたので、徹也が投げているのかと思ったのだが、マウンドにいたのは小柄な控え投手だった。徹也はバッターボックスに入っていた。

制服姿を見ただけでは、ひょろりとした長身という印象が強いのだが、こうしてユニフォームを着たところを見ると、尻や太腿ふとももの肉が厚く、安定感がある。

振り回すというのではなく、軽く合わせているようなバッティングだったが、徹也の打球は、フェンス際で構えている外野手の頭上を、次々とオーバーしていった。金網に当たって跳ね返ることもあったが、フェンスを超えて、体育館の壁に当たるボールも多かった。体育館の前にも球拾いの部員が待機していた。

「徹也クーン」

不意に、女の子たちが声を揃えて叫んだ。

「お？」

といった感じで口を丸めて、徹也が振り返った。女の子たちが、キャーッと歓声をあげる。歓声というよりも、悲鳴に近い声だ。

何だか、ドキッとしてしまった。声に驚いたというよりも、徹也がこちらを見たので、どぎまぎしてしまった。

あいつはぼくがいることに気づいたのだろうか。

なぜぼくは、こんなところにいるのか。女の子たちに混じってネット裏にいる自分が、自分でも不思議だった。



中学校は首都高速のそばにある。ぼくの家は反対側だから、校門を出てすぐに高架の下をくぐる。道路沿いにビルが並んでいるおかげで、しばらく歩くと、車の音は聞こえなくなる。

細い坂道を登り、坂の途中で、もっと細い私道に折れる。

突き当たりがぼくの家だ。

アプローチに母の白いカーリーナEDが駐まっている。

この建売り住宅には、半地下式のガレージが付いていたのだが、サッシを入れてレッスン室に改装したので、手前の狭い通路をいつも車がふさぐことになった。

四十坪ほどの土地いっぱい、二階建ての家が建っている。地下の部分から見上げると、三階建てに見える。白いタイルを貼ったきれいな家だ。でも、最近同じような建売り住宅が周囲にくつも建った。新聞に挟んであるチラシ広告の住宅も、ほとんどが白かベージュのタイルだ。

四年前、小学校五年の時に、この家に引っ越してきたのだが、いまだに、この家が好きになれ

ない。以前の2DKの木造アパートの方が、自分の家という感じがした。子供の頃からの思い出が、部屋のすみずみにしみついてた。

コンクリートの階段を昇って玄関に入る。暗証番号で電子ロックをはずす。家の中には誰もいない。火、木、土曜はお手伝いのおばさんが来るのだが、今日は金曜日だ。

地下からピアノの音が伝わってくる。毎日夕方から夜にかけて、次々にレッスンの生徒が通ってくる。生徒はグランドピアノのふたの上に、封筒に入ったお金を置いていく。生徒の年齢にもよるけれど、母が受け取るレッスン料は、ばくが習っているピアノの先生のレッスン料より、はるかに高い。

地下の響きに、耳をすます。

ベートーヴェンの『テンペスト』だ。女の子らしい堅実なタッチで、お手本のような演奏を続けている。テンポも正確だし、強弱も教えられたとおりに付けている。

でも、それだけだ。

こんなのは、ベートーヴェンじゃない。

母は何よりもテンポの正確さを要求する。機械みたいな無表情な演奏がお気に入りだ。母の生徒の演奏は、どれも、同じように聞こえる。

二階の自分の部屋に上がって、息をつく。

ここまで来ると、地下のピアノの音はほとんど聞こえない。

家が傾斜地に建っているので、二階からの見晴らしはいい。林立するビルの隙間に、高速道路が横に長く延びている。乗用車やトラックの列が見える。下り車線は渋滞が始まっている。上り車線は流れているのだが、鉄のサッシにさえぎられて、音は聞こえない。サイレント映画を眺めているような感じだ。

隣は弟の孝輔こうすけの部屋だ。遠くの私立中学に通っているので、夕食の直前にならないと帰ってこない。この静けさが、あと一時間は続く。

電子ピアノの前に座り、ヘッドフォンを耳にあてる。音をチェンバロにしてバッハのフーガを弾き始める。ピアノは階下のリビングルームにもあるのだが、レッスン中は音を出せない。電子ピアノのキーは軽すぎて、手応えがない。ひとりでに指がすべっていき、泡のように音がわきあがる。

母は夕食の時だけ、顔を見せる。食器をウォッシャーにつっこむと、再びレッスン室に下りていく。

孝輔は毎日大量に出る宿題をこなすために、自分の部屋にこもりきりになる。

ばくだって、三年生だから、高校入試の勉強をしなければならないのだが、どうにも気分が集中しない。結局のところ、また電子ピアノの前に座ってしまうことになる。

どうせみんな